

たべものがほしい

アフリカからのメッセージ

真杉道子



ものがほしい

アフリカからのメッセージ

真杉道子





ポプラ・ノンフィクション④

たべものがほしい

—アフリカからのメッセージ

定価 880 円

発行 1981年 8 月 第 1 刷©

1982年11月 第 8 刷

著 者 真杉道子 (ますぎ みちこ)

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町 5

振 替 東京 4-149271

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 三 進 製 本 所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
NDC 916

Printed in Japan 8095-122004-7764

はじめに



おなかのすくということとはつらいことだ。一食ぬいただけでも目まいがしたり、頭がいたくなったりする子がいる。空腹のためにいらいらしてきて、罪のない弟妹や、イヌ、ネコにまであたってしまったりする。

先進国に住むわたしたちは、一日に三度、十分な食事をするだけではなく、そのあいだになんども間食をする。おいしい物ばかりたべてたべて栄養がかたよって肥満児になったり、病気になったりする。この子はたべなくてこまるんです”といって、スプーンにたべものをいれて子どもをおっかけまわすお母さんたちもたくさんいる。しかし、全世界の子どもたちの半分は、夜、おなかのすいたままベッドにはいる。毎日、世界のどこかで、一分間に二十八人のわりで人が餓死しているという。

たべすぎたときには、絶食がいちばんいい、とめぐまれた人たちはいう。そんなことばをきくたびに、一食ぬいたら、そのよく日は餓死してしまうかもしれない、子どもたちのたくさんいることをわすれないでほしいと願う。

もくじ

プロローグ アフリカの少女エジョーラ

韓国へ

「ボール、パパだよ。おぼえているだろう？」

16

ボールのすきなベルナデタ

24

ミーグクサラミ
アメリカ人がきた！

32

美子
ミージャ

40

キム氏の家族がばらばらに

50

親子、弟をはなればなれにした朝鮮戦争

68

きえてしまった船

83



アフリカへ

“水のつめたいところ” ナイロビ 96

その船を横どりせよ！ 105

カラポコットの勇士 ウオーリヤー 111

トゲのある木の下 of 長老会議 126

アコロの国 130

かわいいポール 144

カクマの少年 150

エピローグ まずしさからわたしが学んだこと



イラスト 稲垣三郎

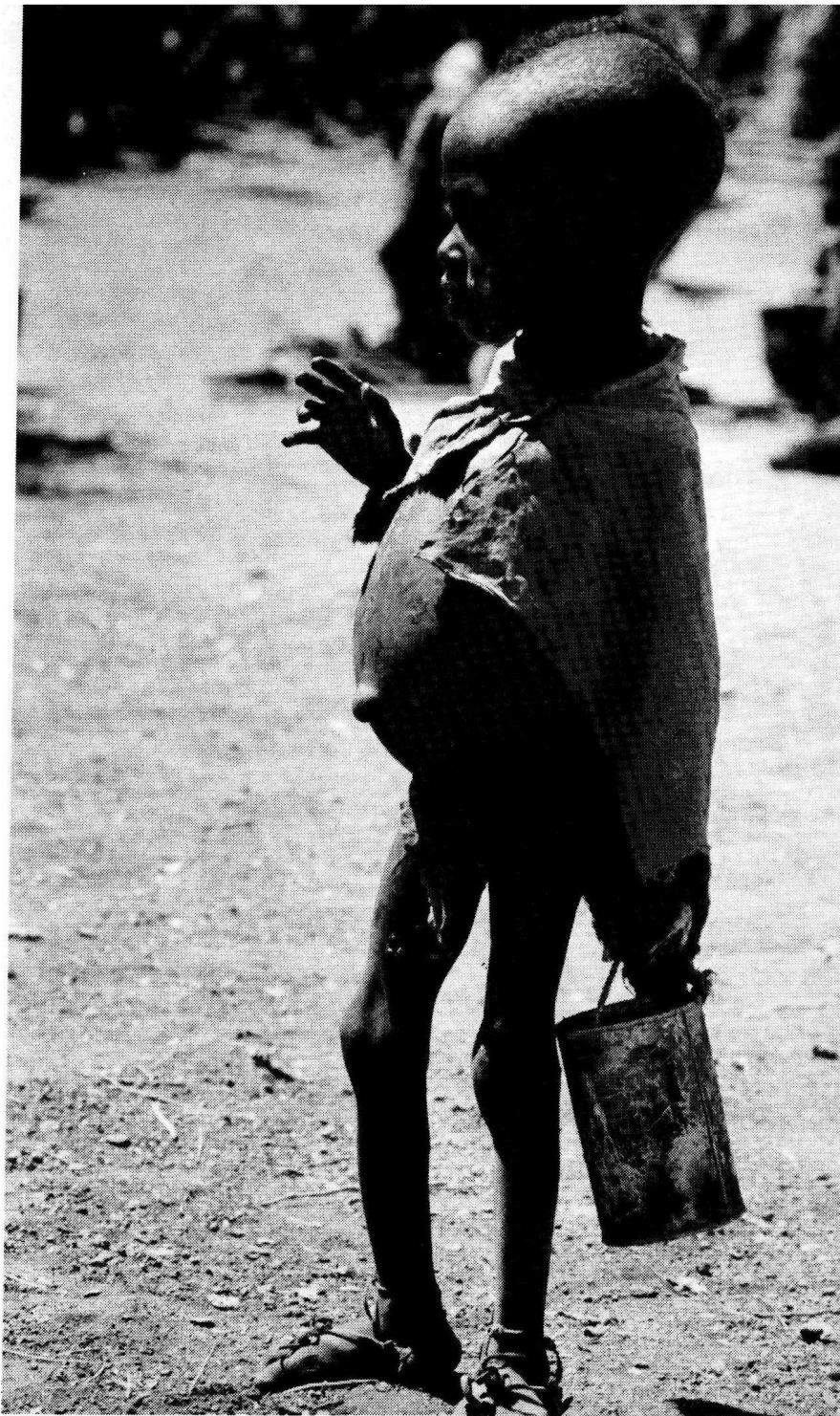
写真提供 三留理男

カトリック救済事業団
ケニアプログラム

たべものがほしい

アフリカからのメッセージ

撮影・三留理男



プロローグ アフリカの少女エジヨラ

わたしは五歳^{さい}のエジヨラという少女に出あった。……

エジヨラは、トルカナ族にぞくする遊牧民^{ゆうぼくみん}である。

エジヨラの国は、遠いアフリカのケニアにある。

彼女は、生まれてから一度も自動車をみたことがない。絵本をみたこともないし、お人形で遊んだこともない。

土のうえにじかに、木の枝^{えだ}をあつめてかこいをつくったところが、彼女の家だ。

エジヨラは、一年間まっぱだかで、洋服^{ようふく}をきたことが一度もない。またのまえに、皮^{かわ}を一まい、こしひもからぶらさげているだけである。

遊牧民の生活は、ふだんでもらくではない。エジヨラは、朝はやくから頭に水おけをのせて、四キロの道があるいて水をくみにいき、お兄^{にい}さんは、朝日がのぼるまえ



からおきだして、ウシ飼^かいとして一日じゅうあつい半砂漠^{はんさばく}地帯をさまよう。

エジヨールの兄妹は、村の人たちとおなじように、ウシやヤギの乳^{ちち}をのんでそだった。家^かちくの乳でヨーグルトをつくり、それに、ウシのくびの血管^{けっかん}からとったしんな血^ちをまぜてのむのが、この人たちのごちそうなのである。

エジヨールは、生まれてはじめての経験をした。

もうこのあたりに、二年ちかくも雨がふらない。

あつい熱風^{ねつふう}が砂^{すな}のたつまきをまきあげて、一日中、夜も昼もふきまくっている。

アフリカ大陸の北部一帯に、大干^{かん}ばつがおそってきたのである。

ちかくの河^{かわ}がひあがってしまったので、かわいた河^{かわ}ぞこにあなを掘^ほって、どろ水^{みず}がにじみあがってくるのをまっては、水をくむ。

ふつうなら、三〇センチも掘ると、かならず水がでてくるのに、今年^{ことし}（一九八〇年）は、一メートルふかく掘っても水がでてこない。

エジヨールは、もう水くみにいくのをやめてから何日もたった。

エジョーラの家には、干ばつ^{かん}がおそってくるまえは、ウシが五〇頭以上もいた。ヤギも五〇頭くらいいた。

ほんとうに幸福な毎日だった。

このおそろしい日でありつづきで、草も水もみんなかれてしまい、ウシやヤギのたべものが、ぜんぜんなくなってしまうた。

はじめにヤギがやせほそって死んだ。

骨^{ほね}と皮^{かわ}ばかりになったヤギが死ぬまえに、お父さんが殺^{ころ}して、その肉をみなでわけてた。つのと、ひづめだけをのこして、内臓^{ないぞう}も、頭もしっぽもみなきれいにたべてしまった。

ウシもどんどんやせていって、アバラ骨^{ぼね}がつきだしてきた。はじめに子ウシが死んで、メウシはお乳^{ちち}をださなくなった。

エジョーラたちのたべものすらなくなってきた。

お父さんは、ウシがぜんぶ死ぬまえに売って、すこしでもお金をもうけて、たべものを買わなければならない、といった。そして、生きのこりのウシをつれて、ながい

旅にでた。そして、ウシも、お父さんも、二度と村にはもどってこなかった。

村の人たちがいった。

「家ちく強^{ごう}とうがウシのむれをみると、おそつてきてウシ飼^かいを殺してウシをうばいさつていく」

お父さんはつよい戦^{ウオリーヤ}士だ。ながいヤリで勇^{ゆう}かに戦う。ウシをうばわれたり殺されたりするものか。

しかし、村の人たちはまたいった。

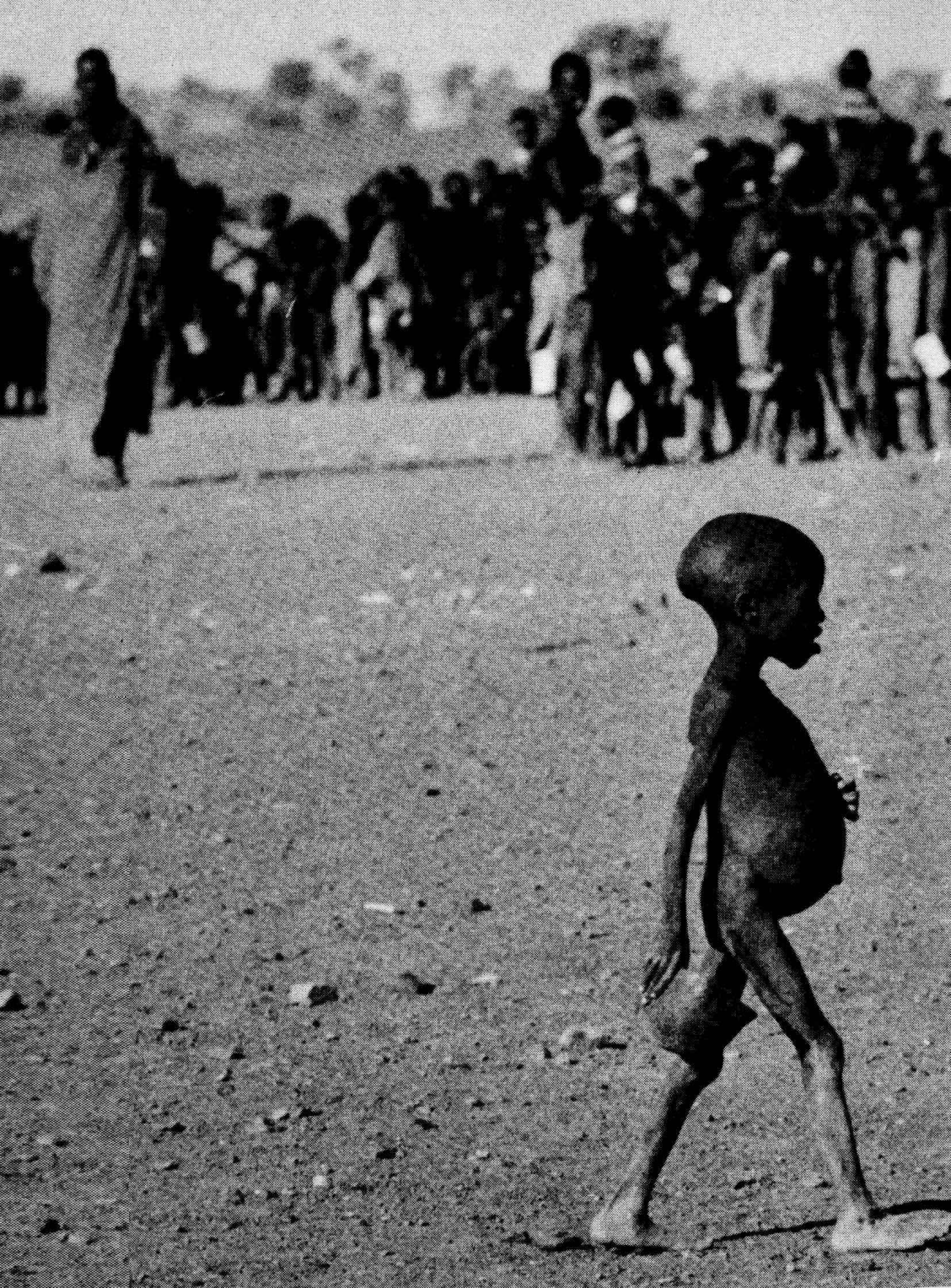
「家ちく強^{ごう}とうは、機関銃^{きかんじゆう}をもって、隊^{たい}を組んでおそつてくる」

エジョーラのお兄さんは、村の、まだ元氣ののこっているわか者たちといっしょに、毎夜^{まいよ}、村にあるただ一つの井戸をまもるために戦いにでていく。水のうばいあいがおこるからだ。

この井戸にも、水がすくなくなってきたという。そしたら、村はぜんめつするのだ！
エジョーラは、毎日、おわん一ぱいのラクダの乳^{ちち}をもらつてのむ。となりにいる人のラクダが、まだ生きているので、その乳^{ちち}をもらうのだ。おなががすいて、なくこと



だべものをもらいに行く子ども（撮影・三留理男）



さえ、できなくなってきた。

まだ赤ちゃんである妹は、骨と皮だけになって、しなびてきた。

一日中、お母さんのお乳にしがみついている。お母さんは、なにもたべてないので、お乳がでない。

お母さんは、なきもしない。

エジヨラに話しかけてもくれない。

一日じゅう、エジヨラといっしょに、木の枝のかこいの中で、だまってすわっている。

だれかが、一〇〇キロもあるいた遠いところに、カトリックのミッシヨン（伝道団体）があつて、そこでは、水とたべものをくれるんだ、といった。

村の人たちが、そこへでていった。

この人たちも、二度と、村にはかえつてこなかった。

そこまでいきつく途中で、のたれ死にしてしまったにちがいない。

その人たちの死がいは、ハイエナが夜でてきてたべてしまった。

“草”だという。

しかし、おなかのへっている人たちは、あたえられたものを、なんでもたべるようになる。すこしばかりのこなミルクをまぜると、よろこんでたべる。

しかし、もう手おくれの子どもたちもたくさんいる。

トウモロコシのこなと、こなミルクをまぜたおかゆすらのみこめない、うえ死にすこしまえの子どもたちには、診療所（クリニック）での応急救置をとらなければならない。

この地方にある、ただ一つのカクマ病院では、アイルランド人のボランティアの看護婦が五人、はたらきつづけている。

この人たちのくるしみをききつけて、世界各国から援助の手がさしのべられてきた。日本からも、たくさんのお金の援助が、はるばるとケニアの救済事業団にとどけられ、このまずしい人たちをたすけるためにやくだったのだ。

こんなことをしたら、エジローラはこうだろうか。

「日本の人びとよ、ありがとう」